日本建築学会大会学術講演梗概集
（近畿）　2014 年 9 月

大船渡市末崎町「ハネウェル居場所ハウス」の設計意図と使いこなしの比較
―東日本大震災被災地域の環境移行を支えるコミュニティカフェに関する研究―

正会員　○生越　美咲 *
同　　森　　傑 **
同　　野村　理恵 ***

環境移行　　集会所　　用途転用
コミュニティ　　復興　　東日本大震災

1. 目的と背景

本研究は、東日本大震災で被災した大船渡市末崎町に地域住民の多世代交流の場を創造することを目指して、2013 年 6 月 13 日にオープンした「ハネウェル居場所ハウス」（以下、居場所ハウスとする）の設計意図と竣工後の使いこなしを比較分析することで、被災地で計画的につくられたコミュニティカフェ[注1)]の地域への定着の過程とそこにおける諸課題について考察することを目的とする。

東日本大震災の被災地では、仮設住宅の居住環境の向上や地域の集会施設づくり、新たなまちづくりに関する支援が現在も継続的に行われている。居場所ハウスもその一つであり、被災者が集い様々な活動へ主体的に関ることのできる居場所づくりを目指して、震災後に計画的につくられたコミュニティカフェである。地域の住民構成や生活環境の変化の中での大きな課題となる環境移行による精神的な負担の軽減に寄与することが目指されている。

2. 居場所ハウスについて

2-1. 居場所ハウスの概要

アメリカ航空宇宙分野の「ハネウェルインターナショナル」による建設費の寄付、非営利人道支援団体「オペレーション USA」や非営利組織「ibasyo」、大船渡市社会福祉法人「典人会」による運営の補助、北海道大学建築計画学研究室による基本設計、「有限会社伊東組」による建設の協力のもとつくられた。

現在、NPO 法人「居場所創造プロジェクト」を中心に、月曜日から日曜日の木曜日を除く、週 6 日間の 10:00 ～ 16:00 まで運営されている。

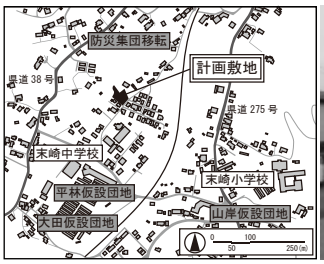


図 1　周辺地図

写真 1　外観写真

2-2. 居場所ハウスの設計意図

(1) 立地と配置

敷地周辺には仮設住宅や今後建設予定である市営住宅や県営住宅、防災集団移転予定地がある。このような地域構造の変化に対応するため、年齢や震災で受けた被害などの区別がなく様々な人々が集まり活動できるような配置としている（図 1）。

(2) 建設プロセス

古民家の構造を尊重し、居場所ハウスでは陸前高田市の古民家を譲り受け、古民家のフレームを再利用するという方法をとった。地元の気仙大工[注2)]の技術により、施設利用者が慣れ親しんだ家のような安心感を得ることをねらいとしている。

(3) 具体的な空間デザイン

多くの利用者が訪れ、かつ利用者が自ら積極的に活動ができるよう、設計者が施設利用の仕方を事細かに規定するのではなく、利用者それぞれが思い思いに使いこなしていくことをねらいとして、大きく分けて 3 つの特徴がある。

①外と中をつなぎ人を呼び込むデザイン

古民家に月見台や大開口といった新しい要素を加えることで中と外の領域を一体化を図る。そのことで、人々の活動の様子を屋外から見ることができ、地域の様々な人々が訪れやすいよう意図されている。

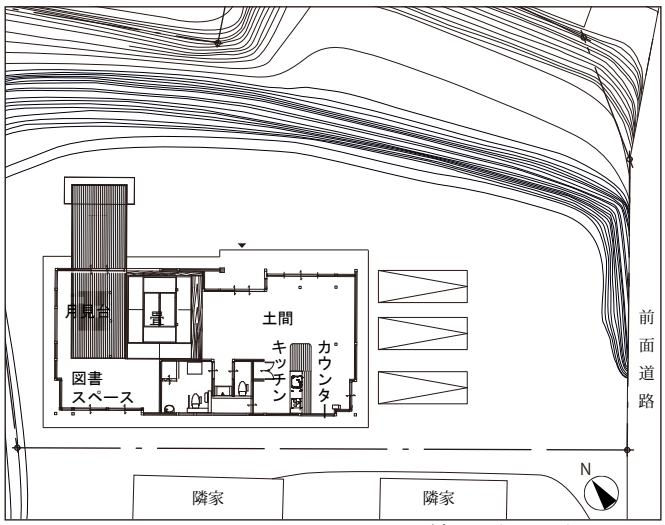


図 2　居場所ハウス平面図　縮尺（1:400）

Comparison between Design Intention and Utilization on "HONEYWELL IBASHO HOUSE" in Ofunato, Japan:Community cafe for supporting Environmental Transition of Areas Affected by the Great East Japan Earthquake

OGOSHI Misaki, MORI Suguru, NOMURA Rie

②ほどよい距離感で自分の居場所を選べるデザイン

様々な活動に対応できるようワンルームで柱によりゆるやかにつながる空間としたうえで、テクスチャーなどの違いによりそれぞれの場所に明確な領域をもたせ、利用者が自分の居場所を発見できるよう意図されている。

③利用者が自らしつらえるデザイン

民家の再利用という手法により、自分の家のような安心感から利用者が建築にしつらえを加えやすいよう意図されている。

本稿では居場所ハウスの地域への定着、つまり使い慣れて行く過程とその際の諸課題を議論するため、③を取り上げ利用者が居場所ハウスをどう使いこなしているのかという観点に注目した分析を行う。

3. 調査概要

設計意図がどう利用実態に反映しているのか把握するため以下3つの調査を行った。コミュニティカフェの地域への定着の過程について考察するうえで、利用実態を経年的にとらえていく必要があると考え、2013年7月と9月に調査を行った。詳細を（表1）に示す。

ヒアリング調査：7月と9月の調査においてそれぞれ37件、21件の結果が得られ、そのうち全質問項目について回答が得られた39件を有効数とした。

行動観察調査：7月と9月の調査においてそれぞれ48回実施し、計96回分の結果が得られた。

実測調査：7月と9月の調査においてそれぞれ6回、計12回分の結果が得られた。

表1　調査方法

	ヒアリング調査	行動観察調査	実測調査
調査実施日	2013年7月15,16日 2013年9月23,24日	2013年7月17,19,20,21日 2013年9月25,27,28,29日	2013年7月15-21日 2013年9月23-29日
調査内容	運営時間（10:00～16:00）に居場所ハウスへ訪れた利用者すべてを対象とし、来訪者の基礎情報や居場所ハウスの利用状況についての質問を行う。	30分おきに居場所ハウスの建物内外を筆者が巡り、10分間で観察できた行動を時刻と共に平面図に記録した。	それぞれの実施日につき一階、居場所ハウスの実測調査を行い、また写真撮影により備品のレイアウトを記録した。

表2　行動分類の定義

（i）プライベート	（ii）セミプライベート
個人が自分以外の他者と関っていない状態。	**複数人が集まり一緒に行動している状態。グループとして特定される。**
具体的にみられた行動として、「洗い物をしている」、「座ってパソコンをしている」などといったものが挙げられる。	具体的にみられた行動として、「〈他人〉と一緒にコースターをつくっている」、「〈他人〉と…について会話している」などといったものが挙げられる。
（iii）セミパブリック	**（iv）パブリック**
複数人があくまで個人の状態を保ったまま他者と関っている状態。	**公的な場に身を置くように、個人として区別されず他者と関っている状態。**
具体的にみられた行動として、「洗い物をしながら〈他人〉と…について会話する。」、「〈他人〉にコーヒーを出す」などといったものが挙げられる。	具体的にみられた行動として、「ゲーム（イベント）の説明を聞いている」、「定例会議をしている」などといったものが挙げられる。

4. 調査結果

2-2. で述べたように居場所ハウスでは、利用者がほどよい距離感で自分の居場所を見つけられるように意図されている。利用者がこの場をどう使いこなしているのかを観察するため、対人距離やパーソナルスペースの概念をふまえ、他者との関り方の状態による程度を定義し、行動観察調査で記録した行動の分類を行った。表2に定義と具体的な行動の例を示す。また、分類した結果をプロット図として表したものを（図3）に示す。

ⅰ）プライベートは、屋内外全体に広く分布している。比較的土間とキッチンに多く、図書スペースや月見台への分布は少数である。

ⅱ）セミプライベートは、比較的屋内全体に広く分布している。土間とキッチンに多く分布しているが、7月では図書スペースでの分布も確認できる。また、9月の分布では畳や月見台、屋外へと分布が広がっている。

ⅲ）セミパブリックは、土間からキッチンにかけて多く分布しており、その他の部分ではほぼ分布が見られなかった。また7月と9月での大きな差異は確認できない。

ⅳ）パブリックでは、7月には分布が無いが、9月では、屋内全体に広く分布がしている。

以上より図書スペースや月見台、屋外は比較的プライベートな空間であることに対し、土間やキッチン、畳はプライベートな使いこなしだけでなく他の利用者と気軽に交流できるなど多様な使いこなしが見られる。

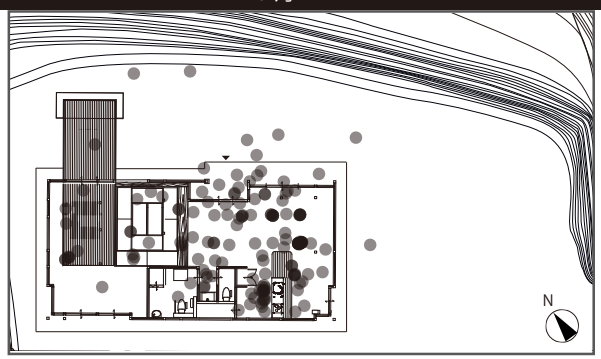
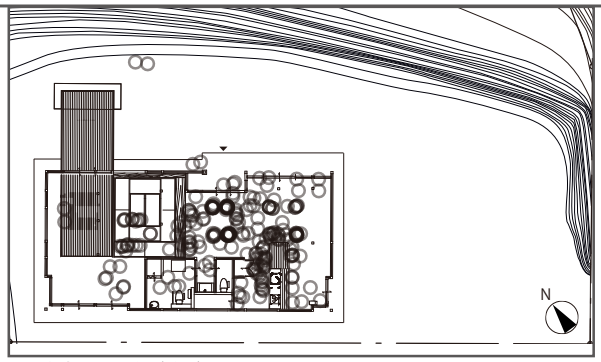
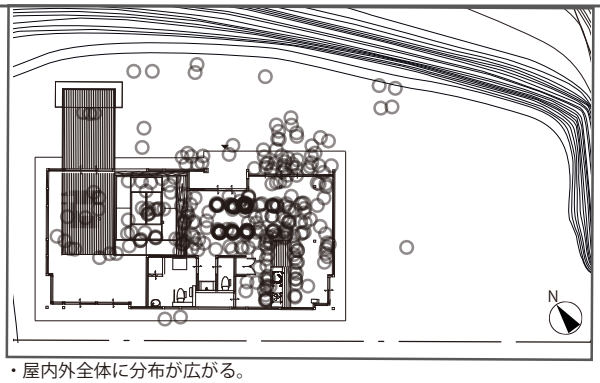
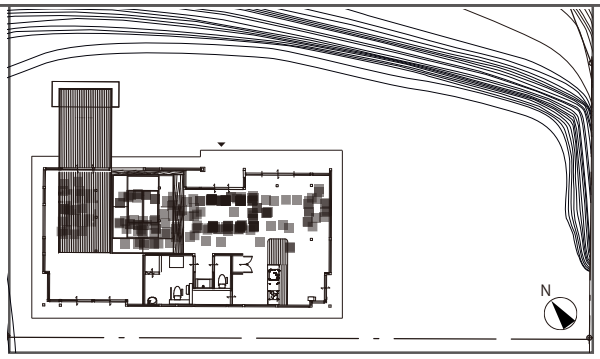
本稿では居場所ハウスの地域への定着の過程について議論するため、時期ごとに変化している使いこなしに注目し設計意図と比較しながら、以下分析を行う。

5. 分析

5-1. 居場所の選択

居場所ハウスでは、2-2.(3)②で述べたように様々な活動に対応できることだけでなく、利用者が他者とほどよい距離感を保ち居場所を発見できることを目指して、柱でゆるやかにつながるワンルーム空間とし、かつテクスチャーの違いによりそれぞれの場所ごとに領域性を持たせるというデザインをした。

図3より7月では見られなかったパブリックという使いこなしが9月では見られた。これは9月に行われたイベント時における使いこなしであるが、視線が通る屋内全体に分布している。居場所ハウスがイベントという非日常の使われ方や活動に対応しており、柱でゆるやかにつながるワンルーム空間が機能しているとわかる。また、9月ではプライベートやセミプライベートの分布が、7月と比較してカウンターと屋外に多く分布し、セミプライベートでは月見台にも多く分布している。この一因としてイベント時に居場所のないと感じる利用者が、遠くからイベントの様子を見ながら過ごしているといった

	7月	9月
プライベート	 ・屋内全体に分布が広がる。 ・比較的土間とキッチンに分布が多く、図書スペースの分布は少ない。 ・屋外にも分布している。	 ・畳からカウンターにかけて分布が広がる。 ・図書スペースの分布が無い。 ・屋外にも広く分布している。
セミプライベート	 ・屋内全体に分布が広がる。 ・キッチンと土間に多く分布し、図書スペースも比較的分布している。 ・屋外や月見台は分布が少ない。	 ・屋内外全体に分布が広がる。 ・図書スペースの分布は無い。
セミパブリック	 ・キッチン、土間に多く分布している。 ・屋外や月見台、図書スペースに分布が無い。	 ・キッチン、土間、カウンターに多く分布している。 ・屋外、月見台、図書スペースに分布が無い。
パブリック	 ・観察された行動なし。	 ・屋内全体に広く分布している。

● プライベート　○ セミプライベート　□ セミパブリック　■ パブリック

図 3　他者との関り方のパターンの分布

じて、場所の領域性により自分の居場所を選択している。しかし、実測調査の結果から主に運営の領域であるカウンターでの分布が増加したことは、運営に携わる人々の利用が多く居場所ハウスの利用者が固定化されている可能性も示唆される。さらに、9月では図書スペースの分布が全パターンにおいて見られない。7月に子どもによって使われていた図書スペースが9月に利用されていないことや、ヒアリング調査の結果（7月の子供の利用者よりも9月の子供の利用者が少ない）をふまえると居場所ハウスに訪れる属性に偏りが生じているといえる。利用者の固定化や属性の偏りは、2-2.(1) で述べた、年齢や住まいなどの区別なく人々が集える場所に必ずしも合致していない。

5-2. 中と外の一体化

居場所ハウスでは、2-2.(3) ①で述べたように人々の活動の様子を屋外から見ることができ、そのことで様々な人々が建物に入りやすいことを目指して、古民家に中と外を貫通している月見台や大きなガラス窓である大開口といった新しい要素を加えることで、中と外の領域を一体化するデザインとした。

図3より9月ではプライベートやセミプライベートで屋外空間への分布が広がっている。5-1. でも述べた屋外のイベント時の利用やその他日常の利用において、利用者の居場所として選択されることは屋内の状況と相互に関係し作用していると考えられる。このことには、外から中の様子が見える主に大開口や月見台といった新しい要素が機能しているといえる。

5-3. キッチンと土間の連続性

居場所ハウスでは、2-2. では詳しく述べなかったが、利用者がサービスを受けるだけでなく主体的に活動に関ることのできることを目指して、利用者がキッチンに入りやすいと感じられるようキッチンを土間に対し垂直に配置しかつ土間と同じテクスチャーにすることで土間とキッチンに連続性を持たせた。

図3よりキッチンや土間は主にプライベートからセミパブリックまで多様な使いこなしが見られる。プライベートな空間でもあり、かつ個人の状態を保ったまま（個人で何か作業しながら）他の利用者と気軽に交流ができる場所であることは、既に述べたキッチンの配置やキッチンと土間の連続性を持たせたことと関ってくると考えられる。そのことでキッチンと土間の間に人々の視線を遮るものがなくなり、キッチンにいるサービス提供側の人々と、土間にいる利用者とが物理的には比較的遠い距離でも気軽に交流できる。

6. まとめ

以上の分析により、本研究では設計意図に対する利用者の使いこなしについて以下3つのことがいえる。

①利用者は設計段階で意図された通りに、居場所ハウス内での様々な状況や活動に対して、ほどよい距離感で他者と関りながら自分の居場所を選択している。しかしながら、9月には利用されなくなった図書スペースなどのように、利用者の固定化や属性の偏りが少なからず生じている。

②利用者は屋内の活動状況に応じて屋外を使いこなしており、これには積極的に屋外へ開いているデザインとした大開口の新しい要素による効果であると考えられる。また、このことは利用者に屋外での滞在という選択肢を与えており、屋内の人々とのほどよい距離感を生み出している。

③セミパブリックの状態において、キッチンと土間の連続性によりうまれる気軽な交流が、他者とほどよい距離感を生み出していることに関っている。

以上より、居場所ハウスは訪れた利用者がそれぞれ思い思いに過ごせる場所であり、利用者の様々な使いこなしを許容する場所である。このような場所は、これから住民構成や生活環境が変わっていく地域が新たな環境に馴染んでいくうえで重要な存在である。一方で利用者の固定化や属性の偏りが生じている状況は、地域のための場でなく一部の利用者の場となり、新たに住民構成に加わった人々にとって訪問しづらい場所になってしまう。このことは地域構造の変化に対応していく場所としてそぐわない課題となる。

今回は主に行動観察調査の結果から他者との関わりの視点から滞在の仕方の使いこなしについて主に分析を行い考察した。今後は、物のしつらえを記録した実測調査や利用者の属性と頻度などを記録したヒアリング調査の結果を相互に交えながら分析を重ねる。

また今回の調査では、2013年7月と9月という時期の比較により分析を行ったが、他者との関り方のパターンの増加やパターンの分布にも変化がみられ、有為な結果が得られた。環境移行の視点を基本に、今後はさらに経年的に調査・分析を進めていく。

注釈

注1)「人と人とのつながりを大事にするもの」、「ちょっと顔を出すとほっとできる場所」と定義されている。出典：WAC、「コミュニティカフェをつくろう！」学陽書房、2007年12月発行

注2) 岩手県気仙郡地方（現在の岩手県気仙郡と、陸前高田・大船渡の両市を含む旧気仙郡を指す）の大工。

*　北海道大学大学院工学院　修士課程　Graduate Student, Graduate School of Eng., Hokkaido Univ

**　北海道大学大学院工学研究院　教授・博士（工学）　Prof., Faculty of Eng., Hokkaido Univ., Ph.D. in Eng.

***　北海道大学大学院工学研究院　助教・博士（学術）　Assis. Prof,, Fuculty of Eng., Hokkaido Univ., Ph.D.